

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学	分野	看護学
学籍番号		院生氏名	青木 恵美子
通学キャンパス			
論文題目	看護学演習における看護学教員に求められるファシリテーションスキル尺度の開発		
審査結果(枠で囲む)	合格		不合格
<p><審査結果の要旨></p> <p>1. 主論文1)研究の概要：研究目的は、看護学演習における看護学教員のファシリテーションスキル尺度(FS尺度)を開発し、信頼性と妥当性を検証する研究である。本研究の意義は、看護教員と学習者が相互に刺激し共に成長できる教育や指導のファシリテーションスキル(FS)が求められていることから意義は大きい。2)研究方法：文献検討、第1段階：看護教員FS構成概念を明確のため12名に半構成的インタビューを実施した。暫定版尺度作成、質問紙作成、解釈可能性、表面妥当性を検討した。10概念88項目から構成する尺度を作成した。基準関連妥当性は、教授活動自己評価尺度-グループワーク用-との関係をPearsonの積率相関係数を用い検証した。尺度全体Cronbach's α係数0.95と内的整合性を確認した。専門家が内的妥当性を検証し、10概念77項目のFS尺度案を作成した。第1因子、時間のゆとりある学習の場を作るスキル。第2因子、安全・安心に発言できる場を作るスキル。第3因子、目標到達に向けて学習者の学びを把握するスキル。第4因子、学習者の興味を引き付けるスキル。第5因子、学習者の状況を把握したうえで話し合いを仕掛けるスキル。第6因子、学習者の主体的な発言を促し学習の相互作用を促すスキル。第7因子、学習者の意見や可能性を引き出すスキル。第8因子、教員間でのファシリテータの役割を共有するスキル。第9因子、学習者の効果的なリフレクションを支援するスキル、第10因子、ファシリテータとして基本的な振る舞いのスキルであった。第2段階：看護学演習におけるFS尺度の妥当性・信頼性の検証。調査1：対象者は、看護師養成校に勤務し、演習を計画・運営している教員経験3年以上、教育活動実践者とした。840校へ協力依頼し、内諾を得た300校の2351名に実施した。調査項目は、FS尺度案77項目、基本属性、FSに関する要因、教授活動自己評価尺度-グループワーク用-を用いた。結果、900名から回収(回収率38.2%)、有効回答855件を分析対象とした。FS尺度案77項目平均は、4.98 ± 0.96点、最大値6以上が32項目あったが、重要項目の為削除はしなかった。確認的因子分析、FS尺度案全体モデルを再検討した結果49項目が抽出された。各因子の下位因子数は、第1因子4項目、第2因子4項目、第3因子4項目、第4因子5項目、第5因子6項目、第6因子6項目、第7因子5項目、第8因子5項目、第9因子4項目、第10因子6項目であった。49項目のCronbach's α係数は、0.95と高い内的整合性を示した。基準関連妥当性は、Pearsonの積率相関係数が高い相関であった。折半法では、高い内的整合性を示した。調査2：テスト-再テストを実施した。研究協力者は、看護系大学、看護系専門学校に勤務している教員経験3年以上の41名に依頼した。2回目は1回目回答1週間後に郵送留め置き法で実施した。分析対象者は、1回目と2回目共に回答があった者とした。FS尺度の各因子得点、尺度合計得点における級内相関係数を算出し、再現性を検討した。分析対象者は、36名(回収率88%)であった。FS尺度の合計得点間の級内相関は、安定性、再現性は確保された。尚、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認(承認番号16-I o-185、18-I g-86)を得ていることから倫理的な問題は無いと考える。</p> <p>3)知見の新規性と価値：本研究の新規性は、看護学演習における看護教員に求められるFSを測定できる尺度を与えたことであり、経験等で漠然と実践してきた看護学演習におけるFSを客観的に評価し、今後の看護学教育において非常に貢献することが出来る研究として高く評価できる。</p> <p>2. 審査経過：審査会は1回開催した後3回メールを用い論文の加筆・修正を求め適切に修正された。</p> <p>3. 口頭試問の結果：口頭試問において適切に応答した。</p> <p>4. 以上の結果から、審査会の審査員全員が本論文を博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	主 査	佐藤 真由美	
	副 査	大池 美也子	
	副 査	森井 和枝	